面上に土地をもち，畑作，酪農が中心であり，その他の旧村は，水稲単作地地の性格を示している。しかし，従来の水稲単作の停滞した農業経営の中にも，最近は，電気揚水で地下水を利用し，かなり開田化が進められている。この開田化は，台地面まで及んでおり（地下水面まで約10m程）一種開田ブームの傾向にあるが，米価が安定している事，又やみ販売でかなりの現金収入となる事などもあづかつていると考えられる。一方，水田酪農などの経営合理化の動きもみられる。しかし，現状としては，むしろ，大都市東京をひかえての主食供給地域であり，今後も大体の農業の性格としては，この傾向が続くとみられる。土地利用と農家経営の頭では，土地利用というものを，地域全体で平均化してみるだけでなく，その土地を利用するところの農家を中心にみる見方も必要と思い sample 農家の生の data で，本地域の地域性の裏づけ又，実際の人間の営みをみようとした。取上げた農家数は少なかつたが，川沿いの旧村の農家，明治時代の華族農場によつて開墾された沼川開墾の農家，台地面上の戦後の開拓村の農家など，夫々，その地域の性格を表わしていた。

秦野盆地北部の地形と土地利用

森田恵子

目　　次

Ⅰ　自然環境概説
　1.地形　2地質　3気候　4地下水
Ⅱ　人文環境概説
　1.行政区界　2沿革　3人口，集落　4交通　5産業
Ⅲ　地形と土地利用
　1地形区分　2水田　3畑地，樹園地，
Ⅳ　秦野の農業
　1概観　2農業経営の状況　3桑とたばこの変遷　4将来の農業
Ⅴ　結論――秦野の中間農業地域性

内　　容

調査地域秦野盆地は新宿から小田急線で約1時間のところにある。北は丹沢山地が1000m～1700mの高さにそびえ，南は大磯丘陵の北端と断層崖をもつて接している。盆地の東部にある240mの権現山に登ると，西に富士山を見南方海上に大島，神津島，又かすかに新島らしきものもみえる。秦野盆地は中央を東南に下る水無川によつてできた扇状地で現在は台地になつており，扇頂から扇端にかけて，長さ6Kmを高度300m～100mに緩かに傾斜した比較的平坦な面をみせ，盆地の周囲と扇頂部には集落がみられるが盆地の中央や丘陵は殆んど全地域にわたり畑地として利用されている。扇頂部には水無川を挟んで秦野市の市街地のり小田急線大秦野駅がある。秦野盆地の東北部には北から南下する金目川によつて形成された隆起扇状地が金目川支流によつて多くの分離丘をなして盆地に接している。地形的には金目川扇状地末端部を走り，秦野盆地内部へもその影響を示している逆断層の存

在することによって、この地域の金目川とその支流及び菖蒲川に特殊な先入蛇行部を形成し又この断層線の北部は断層角盆地が形成され、金目川扇状地区はその末端部において、北の方がやや低いという逆傾斜を示している。盆地内にみられる基盤は全て御坂層及びその凝灰岩が、その上に、礫層をのせ、最上部には10m～20m以上のロームをのせている。

秦野盆地全体が水無川の扇状地である為、水田は湧泉帯以下の低地と金目川河岸段丘上、以下自然の湧水を利用するものが多く、河川からひいて使用しているものは、金目川下流地域だけである。90%を占める畑地は、夏はたばこを主たる目的とし、らっかせい、陸稲蔬菜、イモを作付け、冬は大、小、ビール麦、ソバが栽培されている。本地域はたばことらっかせいで有名であるが、たばこは正史も古く、秦野たばこは火山灰地という悪条件に適するように栽培され、専売公社秦野試験所とともに研究され、極端に技術とカンをもって、労力を多量につぎ込んで栽培されていたが、このような農業の方法はしだいに崩れる運命にある。即ち、輪作を必要とするたばこは耕地面積の少い農家では満足にやって行けないし、反当り5、6万円の収入になるたばこは、農家の総全収入高としては低くないのだが、1日当りの労賃は、300円程度で、投下した労働量に対する報酬としては、誠に少いものだからである。そこで、最近は1万円もする乾燥室の設備はいるが、労働力が少くてすみ、しかも、反当収益は秦野葉よりも1万円以上高い黄色種に、現金を借りて転換することが行われ出した。

この地の一戸当り平均耕地面積は8.2反であるが、最近の著しい傾向として、農業の多角化と兼業化が見われ、少い土地から多くの収益を得ようという蔬菜、酪農、花卉が導入される傾向があると同時に、次、三男、又は、世帯主が、他産業に従事する数も増加している。

一方、秦野市の商工業をみると食料品工業以外には見るべきものがなく、秦野市本町は周囲の農村の消費都市となっている程度である。

しかし、昭和34年には、正式に工場誘致計画が発表され、今後10年間に8000人の労働者を吸収できる工場を秦野盆地の中央の畑地に建設して、農家から出る余剰労働力を消化しようとしている。

しかし、秦野は農業人口が全体の40%以上を占めている今日、この地域は、近郊農村地域とは言い切れず、神奈川県農業の総合的分析による"特殊作物を持ち、内部で複雑な動きを示し、農家層の分化が行われつつある中間農業地域"であるとした。